

鳥の子皿稿

—伝世した白磁の皿—

● 小澤一弘*・堀木真美子
*愛知県埋蔵文化財センター専門委員

中国宋代の定窯の白磁に倣った白磁を、茶人が淡黄色で光沢のある白い鶏卵に似ていることから「鳥の子手」「鳥子」と称した。伝世した白磁の皿より「鳥の子」製品について検討した。『策彦入明記』と茶会記から「トリ皿」にはじまり「鳥皿」「鳥の子」への名称の変遷をたどり、遺跡出土品と茶会記から天正年間以前に「鳥の子」が存在していたことをあきらかにするとともに、名称では天文16年頃にさかのぼる可能性があることを推察した。

今回紹介した伝世品の釉薬や覆輪などの蛍光X線分析を行った。その結果、覆輪が真鍮製であることが判明した。

1. はじめに

「鳥の子」とは、一般的には和紙の一種を指し示す名で、鶏卵のような光沢のある淡黄色の和紙で、滑らかな肌合いが鶏卵を連想されることから「鳥の子」の名称が付いたと言われる。

この「鳥の子」を冠した「やきもの」が伝世品の中に見られる。中国宋代の定窯の白磁に倣った白磁を、茶人が淡黄色で光沢のある白い鶏卵に似ていることから「鳥の子手」「鳥子」と称したとされる。ここでは伝世品を紹介し、遺跡出土品、茶会記から、「鳥の子皿」について考えてみたい。

2. 伝世品

腰折れの端反皿、平底皿、五花平底皿、向付等がある。器種名の前の番号は実測図番号。表1に伝世品法量表。

(I) 箱書に『唐物 平茶碗』とある。

図1、写真1。

1. 端反皿(盤) 口径16.4cm 高台径5.6cm
器高3.2cm 重さ161.1g

腰部に稜のある腰折れした端反の浅い皿で高台には兜巾が見られる。高台内側まで釉が掛けられた全面施釉で、口縁がやや外反し覆輪が施される。器体は薄く軽い。内底はやや浅く窪ませたようにも見られる。内底には、片切彫りのような鋭い刻線で流麗に表現豊かな劃花が描

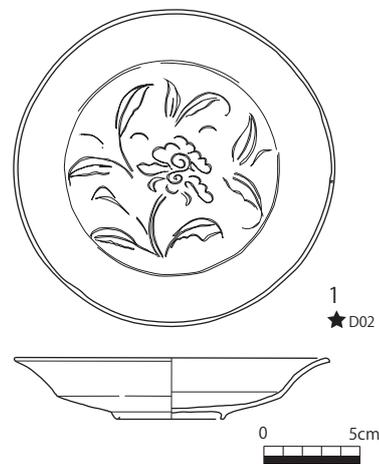


図1 端反皿(1) 実測図



写真1 端反皿(1)

かれているが文様は細く浅い。釉色は青みを帯びた白色の透明釉、釉肌は光沢があるが、高台付近から口縁へと放射状の貫入が激しく内底の劃花は視づらい。劃花は花開く蓮花ひとつを折枝に表した蓮花文か、蓮の花が省略されているが、大きな蓮葉に支えられるように一株の蓮花をまとめる構図かもしれない。

(II) 箱書は無い。図2、写真2。

2. 平底皿 (碟) 口径 14.2cm 底径 10.4cm
器高 2.2cm 重さ 108g

平底で外に真っ直ぐに開いた形で、口縁には覆輪が施される。かすかに黄色味を帯びた乳白色を呈した透明釉が全面に施釉、釉肌は光沢があるが、全面に細かい貫入が入る。底部の器厚が薄いところで1mmと薄い底である。頭をもたげた龍が細い丸鑿(幅2mm)で描かれているが彫りが浅く視づらい。龍が簡略化されるものの、体軀を反転し胸を大きく湾曲させた龍の頭が中央に、下方には二つの鉤爪が前後の2カ所に描かれている。内面に黒色茶色の斑点、鉄分の吹き出し斑点がみられる。底部裏面には

釉の気泡痕が底部縁辺に巡ったごとく多く見られ、気泡痕が剥落し、5カ所(2~1mm)に白い緻密な素地が見られる。覆輪部分の釉は他の部位に比べ薄く、口縁端部の釉を施釉後拭き取ったのかもしれない。

3. 平底皿 (碟) 口径 14cm 底径 10.3cm
器高 1.9cm 重さ 126.5g

平底で外に真っ直ぐに開いた形で、口縁には覆輪が施される。かすかに黄色味を帯びた乳白色を呈した透明釉で全面に施釉、釉肌は光沢があるが、全面に細かい貫入。底部の器厚が薄いところで2mmである。頭をもたげた龍が太い丸鑿(幅4mm)で描かれ彫りが深い。体軀を反転し胸を大きく湾曲させた龍の頭が中央に、龍の頭の右側が二重となり、消し忘れか眼が3点見られる。下方には鉤爪が2カ所にあり後ろの鉤爪が4爪描かれている。底部裏面には釉の気泡痕が底部縁辺に一部見られるが、他の4点に比べ気泡痕は一番少ない。内面に鉄分の吹き出し斑点がみられる。覆輪部分の釉は他の部位に比べ薄く、口縁端部の釉を施釉後拭き取

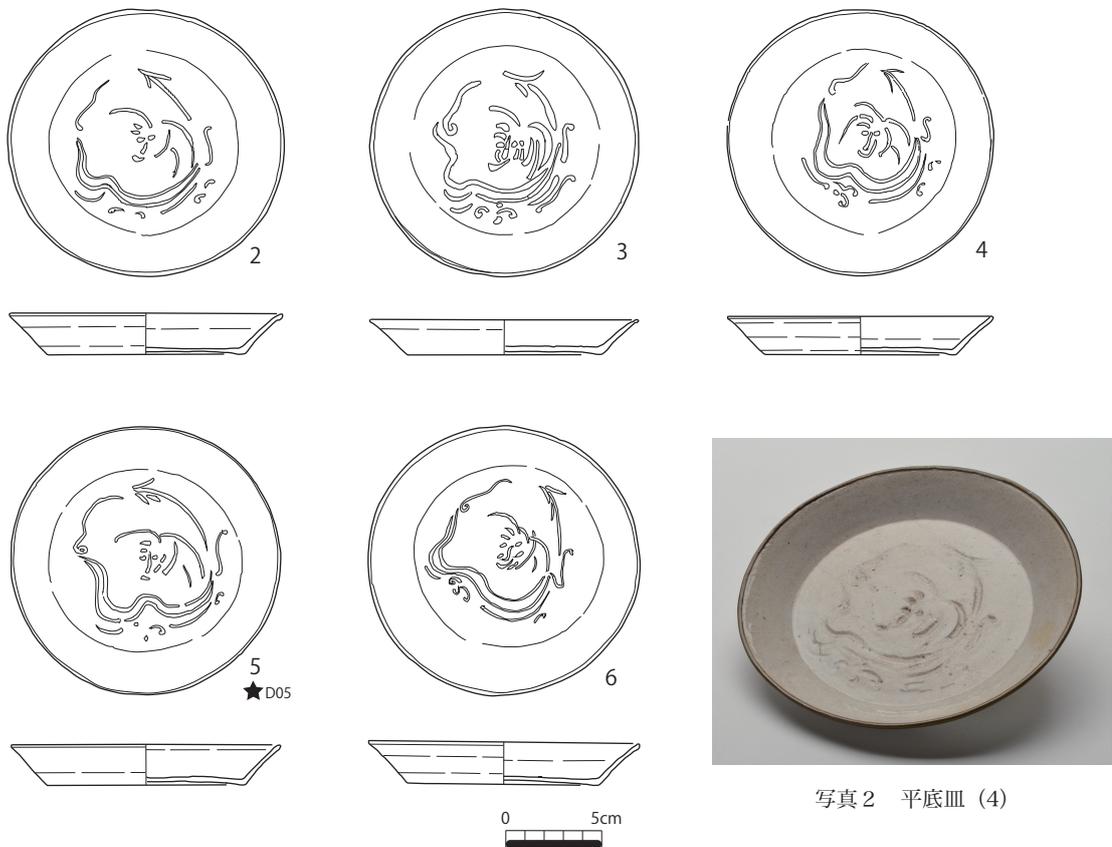


写真2 平底皿 (4)

図2 平底皿 (2~6) 実測図

ったのかもしれない。

4. 平底皿（碟） 口径 13.9cm 底径 10cm

器高 2cm 重さ 95.2g

平底で外に真っ直ぐに開いた形で、口縁には覆輪が施される。かすかに黄色味を帯びた乳白色を呈した透明釉で全面に施釉、釉肌は光沢があるが、全面に細かい貫入。底部の器厚が薄いところで1mmである。頭をもたげた龍が細い丸鑿（幅2～1.5mm）で描かれ彫りが深い。体軀を反転し胸を大きく湾曲させた龍の頭が中央に、下方には鉤爪が2カ所にありいずれも簡略化されている。底部裏面には釉の気泡痕が底部縁辺の一方に見られ、釉の剥落（2～4mm）も目立ち、21カ所で緻密な白い素地が見られる。内面に黒色茶色の鉄分の吹き出し斑点がみられ、覆輪部分の釉は他の部位に比べ薄く、口縁端部の釉を施釉後拭き取ったのかもしれない。

5. 平底皿（碟） 口径 14cm 底径 10.4cm

器高 2.1cm 重さ 108.9g

平底で外に真っ直ぐに開いた形で、口縁には覆輪が施される。かすかに黄色味を帯びた乳白色を呈した透明釉で全面に施釉、釉肌は光沢があるが、全面に細かい貫入。底部の器厚が薄いところで1.5mmの薄い底である。頭をもたげた龍が細い丸鑿（幅2mm）で描かれているが彫りが浅く視づらい。龍が簡略化されるものの、体軀を反転し胸を大きく湾曲させた龍の頭が中央に、下方には簡略化された鉤爪が前後の2カ所に描かれている。底部裏面には釉の気泡痕が底部縁辺の相対する二カ所に見られるが気泡痕が少なく裏面は他に比べきれいである。釉の剥落が9カ所、その中には5mm幅を測る1カ所がある。内外面に黒色茶色の鉄分の吹き出し斑点が多くみられる。覆輪部分の釉は他の部位に比べ薄く、口縁端部の釉を施釉後拭き取っ

表1 伝世品 法量表

箱	No.	器種	口径	高台・底径	器高	底部 最小厚	胴部 最大厚	総重量	分析番号
(I)	1.	端反皿	14.6cm	5.6cm	3.2cm	2mm	2mm	161.1g	★D02
	2.	平底皿	14.2cm	10.4cm	2.2cm	1mm	2mm	108g	
	3.	平底皿	14cm	10.3cm	1.9cm	2mm	2.5mm	126.5g	
(II)	4.	平底皿	13.9cm	10cm	2cm	1mm	2mm	95.2g	
	5.	平底皿	14cm	10.4cm	2.1cm	1.5mm	2mm	108.9g	★D05
	6.	平底皿	14cm	10cm	2.2cm	1.5mm	2mm	108.8g	
(III)	7.	平底皿	13cm	9.1cm	2.1cm	2mm	2.5mm	104g	
	8.	平底皿	12.8cm	9cm	1.9cm	2mm	3mm	107.5g	
	9.	平底皿	13.1cm	8.8cm	1.9cm	2.5mm	2mm	109.8g	
(IV)	10.	平底皿	12.8cm	8.9cm	2.1cm	2.5mm	3mm	114.7g	★D04
	11.	平底皿	12.9cm	9.4cm	2cm	2.5mm	4mm	117.5g	
(V)	12.	五花平底皿	14.8cm	10.6cm	2.6cm	2.5mm	2mm	144.6g	
(VI)	13.	端反皿	16.6cm	8.6cm	4.2cm	3mm	4mm	300.9g	★D01
	14.	端反皿	16.4cm	8.6cm	4cm	4.5mm	4mm	280.1g	元和7年
	15.	端反皿	16.5cm	7.7cm	3.7cm	4mm	3mm	241.1g	
	16.	端反皿	16.6cm	7.6cm	3.8cm	4.5mm	3mm	224.4g	★D03
	17.	端反皿	16.7cm	7.4cm	4cm	5mm	3.5mm	235.9g	
	18.	端反皿	16.7cm	8.1cm	4cm	4mm	3mm	271.2g	
	19.	端反皿	17cm	8.5cm	4.2cm	5mm	3.5mm	317.3g	
	20.	端反皿	17cm	8.4cm	4cm	5mm	3.5mm	292.8g	
	21.	端反皿	17.1cm	8.5cm	4.3cm	5mm	4mm	324.2g	
	22.	端反皿	16.6cm	8.4cm	4.3cm	5.5mm	4mm	333.5g	
(VII)	23.	端反皿	17.4cm	8.4cm	4.2cm	3mm	4mm	303.1g	
	24.	向付	10cm	4.2cm	5.2cm	4mm	3mm	107.4g	
	25.	向付	10cm	4cm	5cm	3.5cm	2mm	92.5g	
	26.	向付	10cm	4.4cm	5.1cm	4mm	2mm	91.9g	
	27.	向付	10cm	4.2cm	5.1cm	3.5cm	2mm	95g	
	28.	向付	10cm	4cm	5.1cm	4mm	2mm	91.6g	
	29.	丸皿	13.6cm	7.5cm	3cm	図なし	10客のうち 覆輪付7客		元禄6年
(VIII)	30.	端反皿	13.5～14cm	7.6～8.1cm	3～3.3cm	図なし	10客 高台付		
	31.	小鉢	14.8cm	5.2cm	7.9cm	図なし	龍文が内底と外面に		

たのかもしれない。

6. 平底皿（碟） 口径 14cm 底径 10cm

器高 2.2cm 重さ 108.8g

平底で外に真っ直ぐに開いた形で、口縁には覆輪が施される。かすかに黄色味を帯びた乳白色を呈した透明釉で全面に施釉、釉肌は光沢があるが、全面に細かい貫入。底部の器厚が薄いところで1.5mmと薄い底である。頭をもたげた龍が細い丸鑿（幅1～2mm）で描かれている

るが彫りが浅く視づらい。龍の頭で眼が上下にあることから書き損じの可能性が考えられる。体軀を反転し胸を大きく湾曲させた龍の頭が中央に、下方には鉤爪が前後の2カ所に描かれているが前の鉤爪は簡略され一爪のみ。底部裏面には釉の気泡痕が底部縁辺に見られ片側一方の気泡痕の幅が1.5cmと広い。口縁の一部には覆輪装着の際生じたヒビがある。

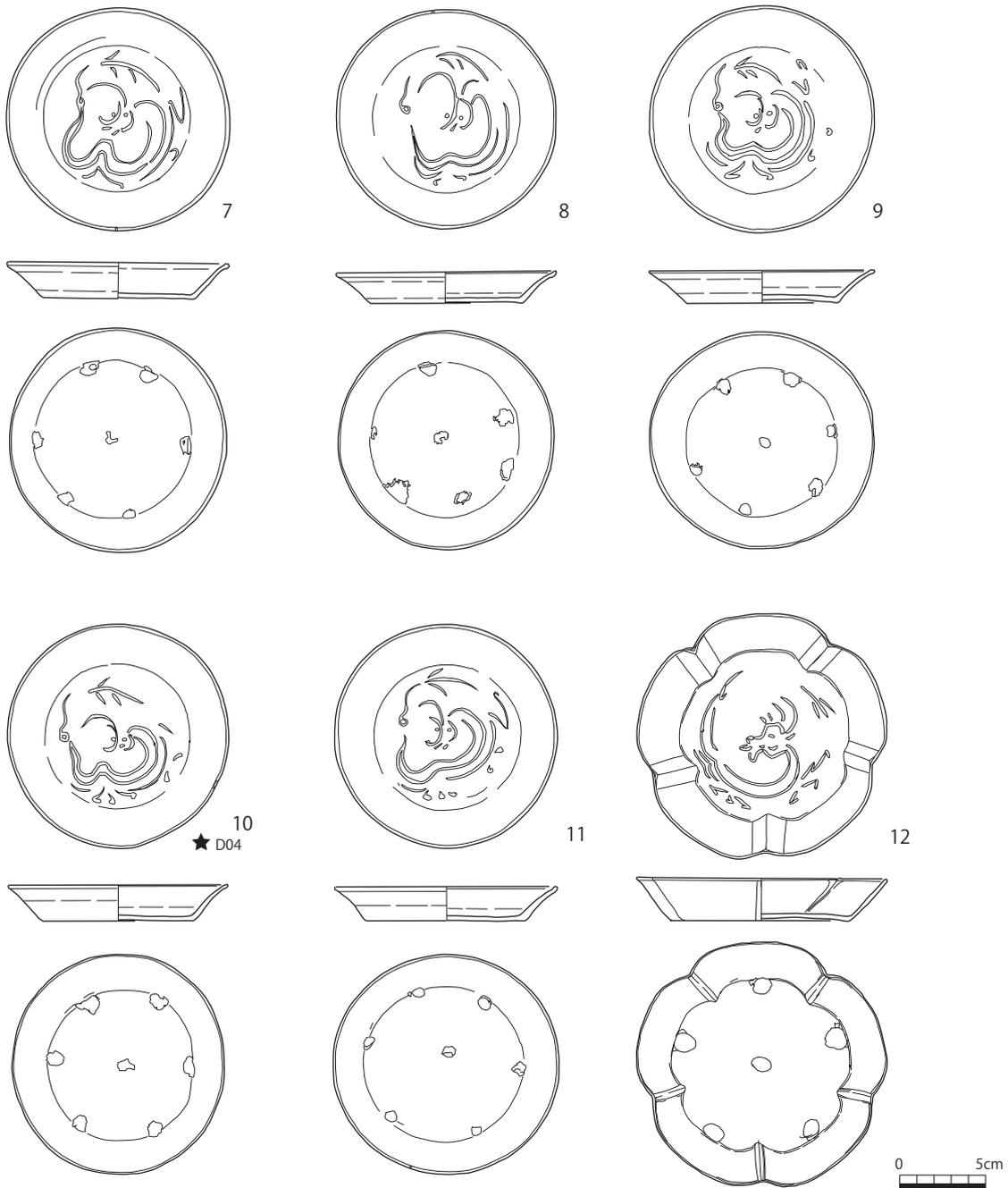


図3 平底皿（5～11）・五花平底皿（12）実測図

(Ⅲ) 箱書に饒洲窯とある。図3。

饒洲窯の名(景德鎮窯)は長く白磁の総称のように用いられ箱書によく見受けられる。

箱書の蓋の表に『饒洲窯 小川琢蔵』

裏に『明治四拾三年六月壹日 名古屋

東袋町長谷川長 [亘宣] 堂より購求

代價金貳拾貳円五拾銭也』とある。

7. 平底皿(碟) 口径13cm 底径9.1cm
器高2.1cm 重さ104g

平底で外に真っ直ぐに開いた形で、口縁は外反気味で覆輪が施される。淡い黄色味を帯びた乳白色の透明釉で全面に施釉、釉肌は光沢があるが、全面に細かい貫入。底部の器厚が底部裏縁辺にはピン痕が6カ所と中央に1カ所見られる。覆輪内側の下に一部緋色が見られ、口縁端部の釉を施釉後拭き取ったのかもしれない。口縁外面の釉がやや厚く流れており覆焼(伏せ焼き)ではない。薄いところで2mmを測る。頭をもたげた龍が細い丸鑿(幅1~1.5mm)で描かれ、彫りが浅く視づらい。体軀を反転し胸を大きく湾曲させた龍の頭が中央に描かれる構図は同じであるが、何が描かれているのかわからない程簡略化されている。

8. 平底皿(碟) 口径12.8cm 底径9cm
器高1.9cm 重さ107.5g

平底で外に真っ直ぐに開いた形で、口縁は外反気味で覆輪が施される。淡い黄色味を帯びた乳白色の透明釉で全面に施釉、釉肌は光沢があるが、全面に細かい貫入。外面に茶色い鉄分か、吹き出し斑点が一部に見られる。底部の器厚が薄いところで2mmを測る。頭をもたげた龍が細い丸鑿(幅1~1.5mm)で描かれているが彫りが浅く視づらい。体軀を反転し胸を大きく湾曲させた龍の頭が中央に描かれる構図は同じであるが、簡略化された構図全体が中央から右側にずれており、龍も縦長に描かれている。底部裏縁辺にはピン痕が6カ所と中央に1カ所見られる。口縁外面の釉が流下している。

9. 平底皿(碟) 口径13.1cm 底径8.8cm
器高1.9cm 重さ109.8g

平底で外に真っ直ぐに開いた形で、口縁は外反気味で覆輪が施される。淡い黄色味を帯びた乳白色の透明釉で全面に施釉、釉肌は光沢があるが、全面に細かい貫入。内外面に黒い鉄分の

吹き出し斑点が一部見られるも外面に多い。底部の器厚が薄いところで2.5mmを測り、底中央部が少し盛り上がる。頭をもたげた龍が簡略化され、太い丸鑿(幅2mm)で描かれているが、彫りは浅く視づらい。簡略化されているが、太い彫りのため龍の構図がはっきりと見られる。底部裏縁辺には楕円形を呈したピン痕が6カ所と中央に1カ所見られる。口縁下に釉たまりが見られる。

10. 平底皿(碟) 口径12.8cm 底径8.9cm
器高2.1cm 重さ114.7g

平底で外に真っ直ぐに開いた形で、口縁は外反気味で覆輪が施される。淡い黄色味を帯びた乳白色の透明釉で全面に施釉、釉肌は光沢があるが、全面に細かい貫入。外面に鉄分の吹き出し斑点が一部に見られる。底部の器厚が薄いところで2.5mmを測る。頭をもたげた龍が簡略化され、細い丸鑿(幅1~1.5mm)で描かれているが、彫りは浅く視づらい。簡略化された構図全体が中央から下側にずれており、下側部分に押し込まれたように描かれている。底部裏縁辺にはピン痕が6カ所と中央に1カ所見られる。覆輪内側の下に一部緋色が見られ、口縁端部の釉を施釉後拭き取ったのかもしれない。口縁下には釉たまりが見られる。

11. 平底皿(碟) 口径12.9cm 底径9.4cm
器高2cm 重さ117.5g

平底で外に真っ直ぐに開いた形で、口縁は外反気味で覆輪が施される。淡い黄色味を帯びた乳白色の透明釉で全面に施釉、釉肌は光沢があるが、全面に細かい貫入。外面に鉄分の吹き出し斑点が一部に見られる。底部の器厚が薄いところで2.5mmを測る。頭をもたげた龍が簡略化され、細い丸鑿(幅1~1.5mm)で描かれているが、彫りは浅く視づらい。底部裏縁辺にはピン痕が6カ所と中央に1カ所見られる。口縁下には釉たまりが見られる。

(Ⅳ) 箱書は無い。図3、写真3。

12. 五花平底皿 口径14.8cm 底径10.6cm
器高2.6cm 重さ144.6g

平底で真っ直ぐに外に開いた五花形で、口縁には覆輪が施される。うすい黄色味を帯びた白色を呈し透明釉が全面に施釉、釉肌は光沢があるが、全面に細かい貫入が入る。鉄分の吹き

出しが黒い点となり見られる。底部の器厚が薄いところで2mmと薄い底である。頭をもたげた龍が細い丸鑿（幅1.5mm）で描かれている。龍が簡略化されるものの、体軀を反転し胸を大きく湾曲させた龍の頭が中央に、下方の二花には三つの鉤爪が描かれ、前足の鉤爪の方が長い。底部裏には布痕が、縁辺にはピン痕が5カ所と中央に1カ所見られる。覆輪内側五花の凹んだ口縁部分の一部に緋色が見られる。

(V) 箱書は無い。図4、写真4。

13. 端反皿（盤） 口径16.6cm 高台径8.6cm
器高4.2cm 重さ300.9g

稜のある腰部から、斜めに直線的に立ち上がる腰折れ皿、口縁には覆輪が施される。黄色味を帯びた乳灰濁色の釉がかかっている。全面に施釉されるが、高台の接地面が素地であることから、施釉後拭き取っているようである。全



写真3 五花平底皿 (12)

面に細かい貫入。底部の器厚が薄いところで3mm、胴部の器厚が薄いところで4mmを測る。胴部内側面に一条の削りによる段を設けている。内底面には、焦げ痕か、やや黄ばんだ影としてピン痕が6カ所丸く巡り、径は約8cmを測る。内外面に黒い鉄分か、吹き出しが見られ外面に多い。

(VI) 元和7年銘の箱書。図5、写真5・6。

箱蓋 中央に墨書有り

『くわんにゆう 大皿 拾』

箱側面の貼付け紙（3.2cm×10.7cm）には三行書かれ、右側より



図4 端反皿 (13) 実測図



写真4 端反皿 (13)

『貫入
鳥乃子皿 十
金フクリン』

上記の反対面の箱側面の貼付け紙は二枚重なっていた。

上紙 (3.2cm×10.7cm) には三行書かれていた。判読不明部分は○とした。右側より

『○
鳥乃子皿 十
貫入金フクリン』

下紙 (4.2cm×約13cm) では二行書かれ、右側より

『○五○日
○皿拾人分』

箱の裏底には紀年銘が見られた。右側より

『元和七年 (1621)
(削られ不明) ○○
辛酉 正月吉日』

箱は黒漆塗り、箱紐は丸紐で、箱蓋は縦23cm、横23cm、高さ3.8cm 厚さ8mm、箱身は縦2.8cm、横20.8cm、高さ20.4cm、総高さ21.5cm を測る。

14. 端反皿 (盤) 口径16.4cm 高台径8.6cm
器高4cm 重さ280.1g

稜のある腰部から開いて立ち上がる腰折れ皿、口縁には、覆輪が施される。黄色味を帯びた乳灰濁色の釉が全面に施釉されるが、稜や高台の一部に露胎した素地部分があり、塗りむらが見られる。高台の接地面が素地であることから、施釉後拭き取っているようである。全面に細かい貫入。底部の器厚が薄いところで4.5mm、胴部の器厚が薄いところで3mmを測る。口縁下の釉が流下している。外面に鉄分の吹き出し斑点が多くみられる。

15. 端反皿 (盤) 口径16.5cm 高台径7.7cm
器高3.7cm 重さ241.1g

稜のある腰部から開いて立ち上がる腰折れ皿、口縁には覆輪が施される。黄白色味を帯びた乳灰濁色の釉が全面に施釉されるが、稜や高台の一部に露胎した素地部分では緋色が見られる。高台の接地面が素地であることから、施釉後拭き取っているようである。全面に細かい貫入。底部の器厚が薄いところで4mm、胴部の器厚が薄いところで3mmを測る。釉の流下状

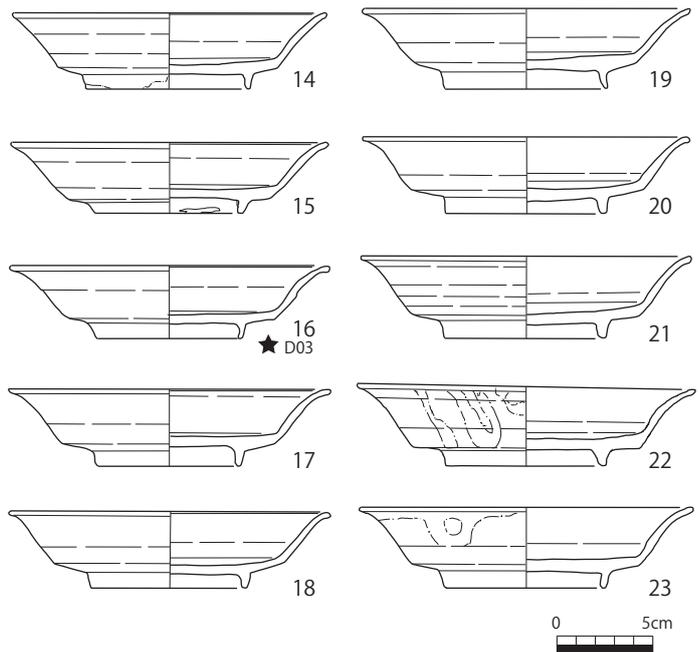


図5 端反皿 (14～23) 実測図



写真5 (VI) 箱蓋



写真6 (VI) 箱裏底

況から横に立てて焼成か、あるいは焼成中にずれて立てた状態になったのかもしれない。

16. 端反皿（盤） 口径 16.6cm 高台径 7.6cm
器高 3.8cm 重さ 224.4g

稜のある腰部から開いて立ち上がる腰折れ皿、口縁には覆輪が施される。淡い黄色味を帯びた乳灰濁色の釉が全面に施釉されるが、稜や高台の一部に露胎した素地部分では緋色が見られる。高台の接地面が素地であることから、施釉後拭き取っているようである。全面に細かい貫入。底部の器厚が薄いところで4.5mm、胴部の器厚が薄いところで3mmを測る。胴部上方には段上になったろくろ痕が見られ、口縁下の釉が流下している。

17. 端反皿（盤） 口径 16.7cm 高台径 7.4cm
器高 4cm 重さ 235.9g

稜のある腰部から開いて立ち上がる腰折れ皿、口縁には覆輪が施される。淡い黄色味を帯びた乳灰濁色の釉が全面に施釉されるが、稜や高台の一部に露胎した素地部分が見られる。高台の接地面が素地であることから、施釉後拭き取っているようである。全面に細かい貫入。底部の器厚が薄いところで5mm、胴部の器厚が薄いところで3.5mmを測る。胴部にはろくろ痕が見られ、口縁下の釉が流下している。

18. 端反皿（盤） 口径 16.7cm 高台径 8.1cm
器高 4cm 重さ 271.2g

稜のある腰部から開いて立ち上がる腰折れ皿、口縁には覆輪が施される。淡い黄色味を帯びた乳灰濁色の釉が全面に施釉されるが、稜や高台の一部に露胎した素地部分では緋色が見られる。高台の接地面が素地であることから、施釉後拭き取っているようである。全面に細かい貫入。底部の器厚が薄いところで4mm、胴部の器厚が薄いところで3mmを測る。胴部には段上になったろくろ痕が見られ、口縁下の釉が流下している。

19. 端反皿（盤） 口径 17cm 高台径 8.5cm
器高 4.2cm 重さ 317.3g

稜のある腰部から開いて立ち上がる腰折れ皿、口縁には覆輪が施される。黄色味を帯びた乳灰濁色の釉が全面に施釉されるが、稜や高台の一部に露胎した素地部分が見られる。高台の接地面が素地であることから、施釉後拭き取っ

ているようである。全面に細かい貫入。底部の器厚が薄いところで5mm、胴部の器厚が薄いところで3.5mmを測る。口縁下の釉が流下している。

20. 端反皿（盤） 口径 17cm 高台径 8.4cm
器高 4cm 重さ 292.8g

稜のある腰部から開いて立ち上がる腰折れ皿、口縁には覆輪が施される。淡い黄色味を帯びた乳灰濁色の釉が全面に施釉されるが、稜や高台の一部に露胎した素地部分があり緋色が見られる。高台の接地面が素地であることから、施釉後拭き取っているようである。全面に細かい貫入。底部の器厚が薄いところで5mm、胴部の器厚が薄いところで3.5mmを測る。口縁下の釉が流下している。

21. 端反皿（盤） 口径 17.1cm 高台径 8.5cm
器高 4.3cm 重さ 324.2g

稜のある腰部から開いて立ち上がる腰折れ皿、口縁には覆輪が施される。淡い黄色味を帯びた乳灰濁色の釉が全面に施釉されるが、稜や高台の一部に露胎した素地部分があり緋色が見られる。高台の接地面が素地であることから、施釉後拭き取っているようである。全面に細かい貫入。底部の器厚が薄いところで5mm、胴部の器厚が薄いところで4mmを測る。口縁下の釉が流下している。

22. 端反皿（盤） 口径 17.6cm 高台径 8.4cm
器高 4.3cm 重さ 333.5g

稜のある腰部から開いて立ち上がる腰折れ皿、口縁には覆輪が施される。淡い黄白色味を帯びた乳灰濁色の釉が全面に施釉されるが、稜や高台の一部に露胎した素地部分があり緋色が見られる。高台の接地面が素地であることから、施釉後拭き取っているようである。全面に細かい貫入。底部の器厚が薄いところで5.5mm、胴部の器厚が薄いところで4mmを測る。口縁下の釉が流下し釉溜まりが目立つ。

23. 端反皿（盤） 口径 17.4cm 高台径 8.4cm
器高 4.2cm 重さ 303.1g

稜のある腰部から開いて立ち上がる腰折れ皿、口縁には覆輪が施される。淡い黄白色味を帯びた乳灰濁色の釉が全面に施釉されるが、稜や高台の一部に露胎した素地部分があり緋色が見られる。高台の接地面が素地であることか

ら、施釉後拭き取っているようである。全面に細かい貫入。底部の器厚が薄いところで5mm、胴部の器厚が薄いところで3.5mmを測る。口縁下の釉が流下している。内底隅の一部釉が白濁化している。

(VII) 箱書の和紙(3cm×10cm)に『鳥之子手 向附五』とある。図6、写真7・8。

口縁下に涙痕といわれる釉溜まりが見られることから、覆焼(伏せ焼き)で焼かれていた。

24. 向付 口径10cm 高台径4.2cm
器高5.2cm 重さ107.4g

丸みを帯びた腰部から、やや開き気味に立ち上がった碗形で、端反口縁には、覆輪が施される。淡い黄色味を帯びた白色の透明釉が全面に施釉されるが、高台の接地面が素地であることから、施釉後拭き取っているようである。釉肌は光沢があるが、全面に細かい貫入。内底面(見込)部分が広い。底部の器厚が薄いところで4mm、胴部の器厚が薄いところで3mmを測る。口縁下には釉溜まりの涙痕が2カ所と胴部に金継ぎによる補修が見られる。

25. 向付 口径10cm 高台径4cm
器高5cm 重さ92.5g

丸みを帯びた腰部から、やや開き気味に立ち上がった碗形で、端反口縁には、覆輪が施される。淡い黄色味を帯びた白色の透明釉が全面に施釉されるが、高台の接地面は素地で、施釉後拭き取っている。釉肌は光沢があるが、全面に細かい貫入。内底面(見込)部分が広い。底部の器厚が薄いところで3.5mm、胴部の器厚は薄い所で2mmを測る。

26. 向付 口径10cm 高台径4.4cm
器高5.1cm 重さ91.9g

丸みを帯びた腰部から、やや開き気味に立ち上がった碗形で、端反口縁には、覆輪が施される。淡い黄色味を帯びた白色の透明釉で全面に施釉されるが、高台の接地面は素地で、施釉後拭き取っている。釉肌は光沢があるが、全面に細かい貫入。内底面(見込)部分が広い。底部の器厚が薄いところで4mm、胴部の器厚は薄い所で2mmを測る。高台脇には釉溜まりの涙痕が、端反口縁下にも釉たまりが見られる。

27. 向付 口径10cm 高台径4.2cm
器高5.1cm 重さ95g

丸みを帯びた腰部から、やや開き気味に立ち上がった碗形で、端反口縁には、覆輪が施される。淡い黄色味を帯びた白色の透明釉で全面に施釉されるが、高台の接地面は素地で、施釉後拭き取っている。釉肌は光沢があり、全面に細かい貫入。内底面(見込)部分が広い。底部の器厚が薄い所で3mm、胴部の器厚は薄い所で2mmを測る。口縁下に釉溜まりが見られる。

28. 向付 口径10cm 高台径4cm
器高5.1cm 重さ91.6g

丸みを帯びた腰部から、やや開き気味に立ち

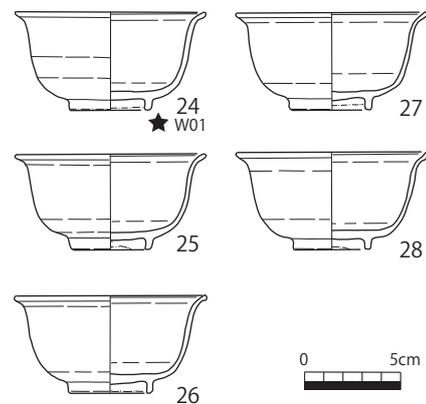


図6 向付(24~28)実測図



写真7 向付(24)



写真8 (VII)『鳥之子手 向附五』の箱書

上がった碗形で、端反口縁には、覆輪が施される。淡い黄色味を帯びた白色の透明釉で全面に施釉されるが、高台の接地面は素地で、施釉後拭き取っている。釉肌は光沢があるが、全面に細かい貫入。内底面（見込）部分が広い。底部の器厚が薄いところで4mm、胴部の器厚は薄い所で2mmを測る。口縁下に釉溜まりが見られる。

(Ⅷ) その他

29. 元禄6年（1693）銘の箱書。写真9・10。
箱底に四行

『丑四月吉日』

『樽味』

『元禄六 西 七月吉日 求』

『上田李保』

箱の側面には『〇〇皿十』の墨書がある。

丸皿が十客で、文様はない。その内三客は口縁に覆輪がなく口紅で鉄釉が施されている。覆輪付七客は口径13.6cm、底径7.5cm、器高3cmを測る。覆輪がない鉄釉口紅の三客は、口径

13.8cm、底径7.6cm、器高3.3cmを測る。乳灰濁色の釉が全面に施釉され釉全面に細かい貫入が。箱の紐穴より紐は丸紐であった。丑四月（1697）と七月に筆跡の違いがある。

30. 箱書は無い。写真11。

高台付端反皿が十客で、文様はない。口縁に覆輪が施され、全面に貫入。口径13.5～14cm、底径7.6～8.1cm、器高3～3.3cmを測る。

31. 『とりの子 はち』の箱書。写真12。

龍文小鉢で、口径14.8cm、底径5.2cm、器高7.9cmを測る。碗形の鉢で口縁に覆輪が施され、見込みにも龍文が描かれている。黄色が強い。

3. 伝世品の蛍光X線分析

今回の伝世品の釉薬及び胎土、覆輪の成分について、蛍光X線分析を行なった。1資料につき、無釉部分による素地、釉薬の表面、覆輪



写真9 (Ⅷ) 元禄六年銘の箱



写真11 高台付端反皿 (30)



写真10 丸皿 (29)



写真12 龍文小鉢 (31)

部分の金属、覆輪の継目部分の金属の4種類の素材部分について、それぞれ2箇所ずつ測定を行なった。分析装置は(株)堀場作所製のエネルギー分散型蛍光X線分析装置XGT-5000XIIを用いた。素材部分と釉薬部分の測定条件は、励起電圧：30kV、計測時間：500s、X線管球：Rh、測定雰囲気：大気中、X線照射径：100 μ mである。覆輪に関する金属部分の測定条件は、励起電圧：50kV、計測時間：500s、X線管球：Rh、測定雰囲気：大気中、X線照射径：100 μ mである。試料の測定箇所については、軽く布で汚れを落とす程度の表面調整をおこな

った。

分析の結、素材及び釉薬の測定では、それぞれに検出される元素に大きな違いがみられなかったことから、Na(ナトリウム)、Mg(マグネシウム)、Al(アルミニウム)、Si(ケイ素)、P(リン)、K(カリウム)、Ca(カルシウム)、Ti(チタン)、Fe(鉄)について、それぞれを酸化物としてファンダメンタル法によって、成分比を算出した。この値は、あくまでも目安であり、分析の絶対値としては扱えないものである。

釉薬は、長石や植物灰などの珪酸を骨材とし、酸化アルミニウムを糊材、酸化カルシウ

表2 蛍光X線分析結果

素材部分	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	Fe ₂ O ₃
D01-1	0.0	0.0	17.5	78.2	0.0	3.0	0.9	0.2	0.3
D01-2	0.0	0.0	22.8	73.2	0.0	2.2	0.8	0.4	0.6
D01-3	0.0	0.0	19.2	75.8	0.4	2.8	1.3	0.1	0.4
D02-1	0.0	0.0	11.0	86.0	0.0	0.3	2.6	0.0	0.1
D02-2	0.0	0.0	11.3	82.0	0.0	2.3	4.1	0.0	0.2
D03-1	0.0	0.0	22.9	71.8	0.2	3.1	0.3	0.6	0.9
D03-2	5.4	0.7	23.8	64.9	0.3	3.3	0.3	0.5	0.8
D04-1	5.5	0.0	7.1	83.8	1.0	2.1	0.4	0.1	0.2
D04-2	3.9	0.0	11.1	73.8	1.8	5.4	0.4	0.8	0.9
D05-1	0.0	0.0	26.3	71.9	0.0	1.3	0.2	0.1	0.3
D05-2	0.0	0.0	28.4	68.0	0.0	2.0	0.2	0.1	0.3
W01-1	0.0	0.0	15.7	79.5	0.0	3.3	0.9	0.0	0.6
W01-2	0.0	0.0	21.1	74.6	0.1	2.7	0.7	0.1	0.7
釉薬部分	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	Fe ₂ O ₃
D01-6	0.0	0.0	17.0	74.5	0.1	6.2	2.0	0.1	0.1
D01-7	0.0	0.0	18.0	73.0	0.2	6.1	2.3	0.3	0.2
D02-3	0.0	0.0	12.0	78.6	0.0	2.3	6.8	0.0	0.2
D02-4	0.0	0.0	11.6	79.4	0.0	2.4	6.4	0.0	0.3
D03-3	6.3	0.0	18.0	68.6	0.1	4.4	2.0	0.1	0.5
D03-4	2.6	0.7	17.8	71.0	0.1	4.6	2.5	0.2	0.5
D04-3	5.4	0.0	17.2	71.7	0.1	5.1	0.5	0.0	0.1
D04-4	6.6	0.0	16.9	71.2	0.1	4.6	0.5	0.0	0.1
D05-3	0.0	0.0	17.8	77.7	0.0	3.7	0.5	0.0	0.3
D05-4	0.0	0.0	18.1	77.6	0.0	3.5	0.6	0.0	0.3
W01-3	6.7	0.0	16.4	72.7	0.1	2.2	1.4	0.0	0.5
W01-4	0.0	0.0	16.3	79.0	0.2	3.0	1.2	0.0	0.5

表3 江本による定窯の分析結果

釉薬の表面のX線マイクロアナライザーによる定量分析結果(%)

			SiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	TiO ₂	CaO	MgO	Na ₂ O	K ₂ O	P ₂ O ₃
No.01	潤磁村	5-8	70.0	20.2	0.8	0.3	4.6	0.4	0.7	1.9	0.3
No.06	潤磁村	82-12	70.9	19.0	0.9	0.2	4.0	2.3	0.3	2.1	0.3
No.10	潤磁村	11-1	61.3	17.2	0.8	0.1	14.2	3.3	0.5	1.8	0.7
No.12	潤磁村	15-3	63.7	13.8	1.0	0.1	15.1	2.9	0.4	2.1	1.0
No.16	燕山	86-9	72.3	16.6	0.6	0.04	4.5	2.7	0.3	2.6	0.4
No.17	燕山	86-11	63.3	14.7	3.2	0.3	12.5	2.3	0.2	2.2	1.3

*江本1986より引用

ム:CaO) などのアルカリ土類酸化物や土灰 (木灰) などを媒熔媒熔剤、酸化コバルト (CoO) などを着色剤として含有している。例えば、糊材とされる酸化アルミニウムは釉薬が結晶化するのを防ぎ、釉薬の清澄性を促進すると同時に適当な粘りを持たせ、厚みを均一にするような働きがあるとされる。媒熔剤は、釉薬の溶ける

温度を調節するために加えられるものである。そこで、この釉薬の分析結果について、 Al_2O_3 -CaO-K₂O の3元素の比率に注目し、三角ダイアグラムに表した。その結果、D02が他の資料にくらべ、ややCaOが多いことが判明した。定窯産の皿に関しては、江本1983に詳細な分析値が示されている。この分析では、釉薬の

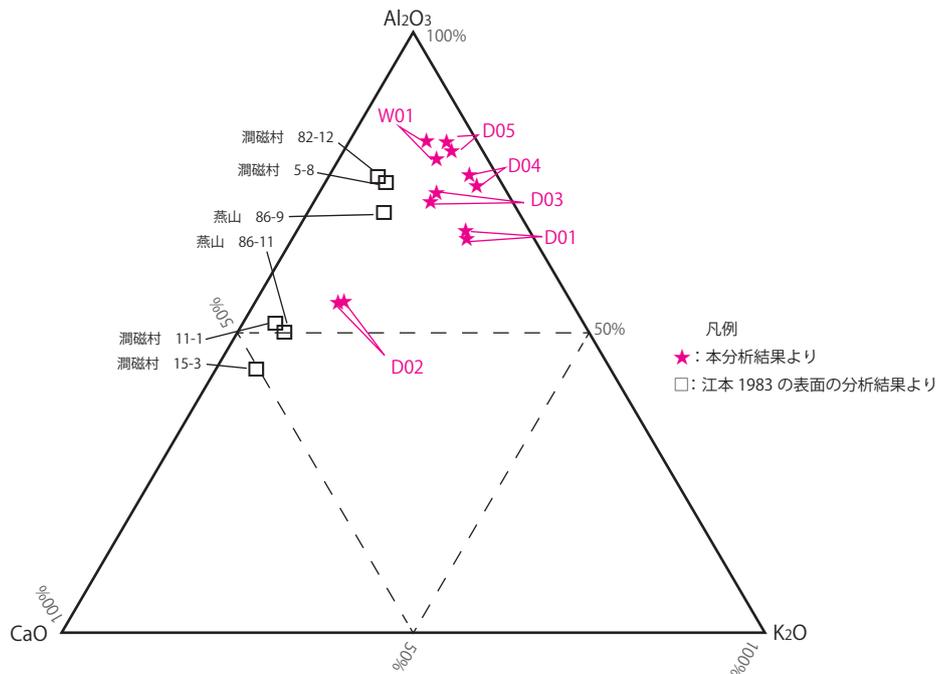
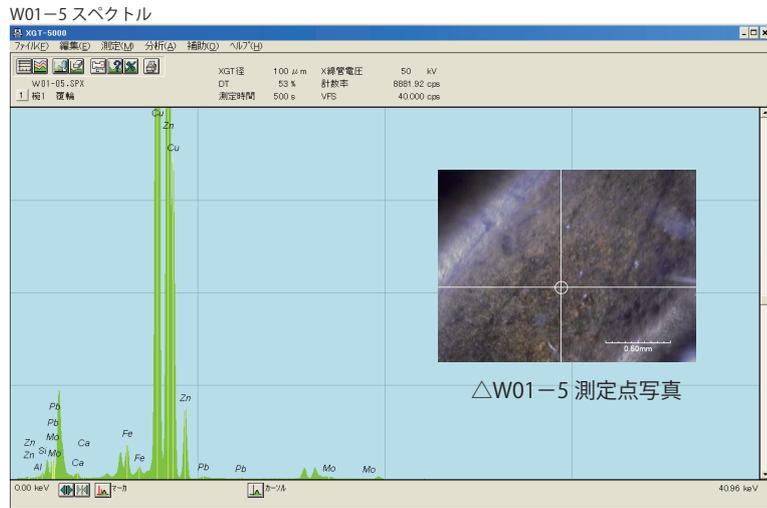


図7 Al_2O_3 -CaO-K₂O ダイアグラム

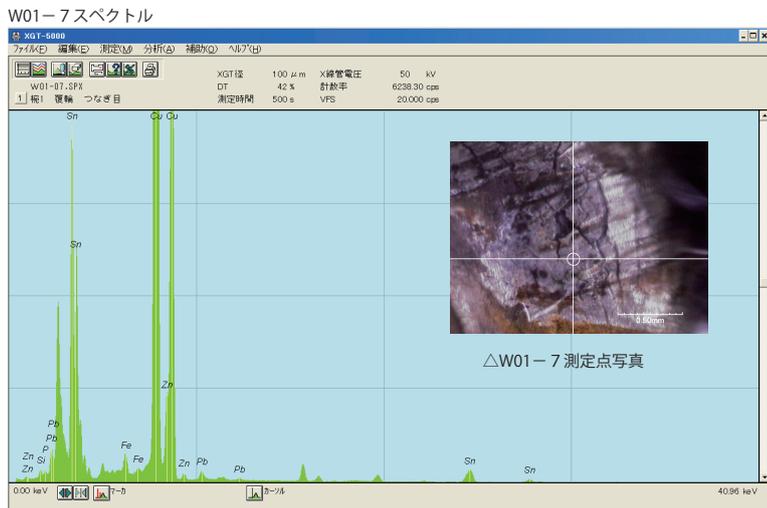
表4 覆輪部分で検出された元素

	Cu	Zn	Pb	Sn	Fe	Mn	Ca	Si	P	Cl	Al	Ti	K	Ni	Cr	As	Rb	Au	Cd	Mo
D01-4 (覆輪)	○	○			○				△											
D01-5 (覆輪)	○	○			○	○	○		△											
D01-8(つなぎ目)	○	○	○	○	○					○		○								
D02-5 (覆輪)	○	○				○	△												○	○
D02-6 (覆輪)	○	○					△													
D02-7(つなぎ目)	○	○	○	○				△				△	△							△
D02-8(つなぎ目)	○		○	○								△								
D03-5 (覆輪)	○	○			○	○	△	△		○	△		△							
D03-6 (覆輪)	○	○			○		△	△		○	△		△							
D03-7(つなぎ目)	○	○	○	○				△			△									
D03-8(つなぎ目)	○	○	○	○							△									○
D04-5 (覆輪)	○	○	○		○	○	△	△	△											
D04-6 (覆輪)	○	○	○		○	○														○
D04-7(つなぎ目)	○	○	○	○	○			△	○						○	△				
D04-8(つなぎ目)	○	○	○	○				△	○							△				
D05-5 (覆輪)	○	○			○		△	△	△						○					
D05-6 (覆輪)	○	○	○		○		△	△	△		△									
D05-7(つなぎ目)	○	○	○	○	○															△
D05-8(つなぎ目)	○	○	○	○																
W01-5 (覆輪)	○	○	○		○		△	△			△				△					
W01-6 (覆輪)	○	○	○		○	○	△	△			△									
W01-7(つなぎ目)	○	○	○	○	○	○	△	△	△			△								
W01-8(つなぎ目)	○	○	○	○	○	○		△			△									△
W01-9(金継)	○	○			○	○					△	△			△			○	○	
W01-10(金継)	○				○		△											○	○	

覆輪部分の測定



覆輪（継目）の測定



金継部分の測定

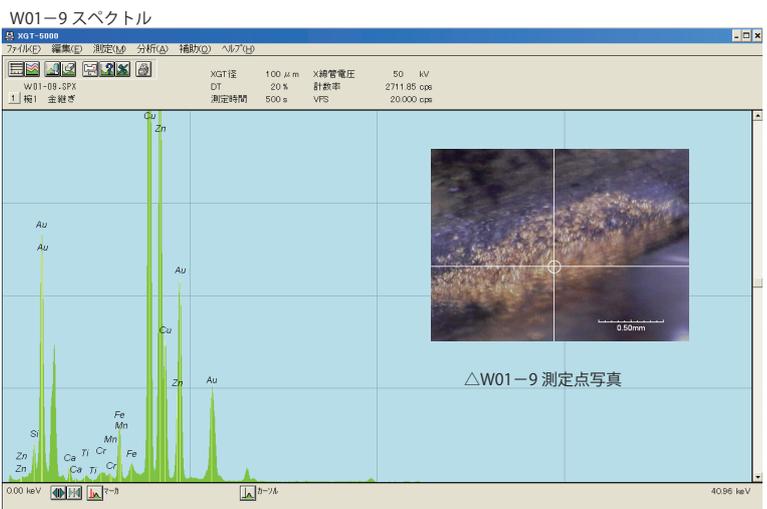


図8 覆輪部分の蛍光X線分析結果

表面を研ぎ落した粉末を主な試料とし、溶融または粉末のまま分析を行ったものである。本論の分析は、試料の表面に対し、未処理の状態では蛍光X線を照射して測定したものである。江本の測定とは、対象物そのものが異なるため、直接の比較は意味をなさない。ただし、江本の分析のうち、釉薬表面のマイクロアナライザーによる定量分析がある。この分析については、測定対象が同じである。が、測定方法が異なることから、直接の比較はできない。そこで、 Al_2O_3 - CaO - K_2O の3元素の比率で本論の結果との比較を行った。その結果、江本の分析でも本論でも共にCaOに偏りがみられた。

次に覆輪の金属部分の測定について述べる。覆輪部分の金属部分の分析では、各部分で異なる元素が認められた。覆輪自体は、Cu（銅）とZn（亜鉛）が多く含まれていることから、真鍮製であると判断した。また継目部分では、Cu、Znに加えPb（鉛）とSn（錫）が含まれていることから、ハンダ合金が使用されていると考えられる。

向付の資料（W01）では、金継ぎが認められた。この金継ぎ部分を測定したところ、Au（金）、Cu（銅）、Fe（鉄）、Rb（ルビジウム）が認められた。

4. 徳川美術館の所蔵品

尾張徳川家に伝世した「鳥の子」がある。徳川美術館の所蔵品に刻花蘭文皿、刻花竜雲気文皿、刻花龍文皿がそれぞれ展覧会に出品された。（）の数字は枚数、表5に法量表。

白磁刻花蘭文皿（五）、白磁刻花竜雲気文皿（五）、白磁刻花龍文皿（八）、白磁刻花龍雲気文皿（十）が京都国立博物館、根津美術館、五島美術館の展覧会図録に掲載されており、「鳥の子」の研究史とも言える解説を、各図録より

転載した。No. は展覧会の展示 No. そのままである。

（1）『特別展覧会日本人が好んだ中国陶磁』 平成3年（1991）京都国立博物館

113. 白磁刻花蘭文皿（鳥の子皿） 五口
高 2.7cm 口径 12.1cm 高台径 4.2cm
明時代（15～6世紀）

尾張徳川家（徳川美術館）に「鳥の子砂張覆輪繪なます皿」として伝えられている作品である。端反り風の浅い皿で、腰でかつきりと段をつけ、小さい高台を削り出し、見込みには蘭のような文様を刻花で表している。宋代の名窯定窯の作風に倣なつた中国南方の民窯で製作されたものであろう。こうした淡黄色の軟陶を、多分鳥の卵と重ね併せて「鳥の子」と呼び習わしたものであろう。製作時期も長期にわたるものと思われる。

114. 白磁刻花龍雲気文皿 五口
高 3.3cm 口径 16.1cm 底径 9.7cm
明時代（15～6世紀）

113 図の作品とよく似た浅い皿であるが、この方は高台を削り出さず、平底に作り、口縁部には砂張の覆輪を施している。素地も灰白色の

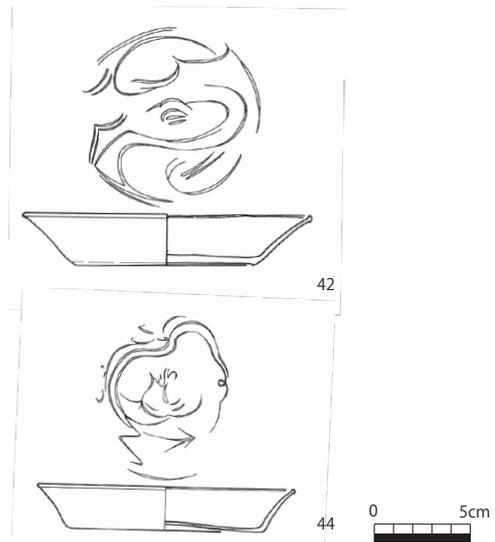


図9 徳川美術館収蔵品（42・44）

表5 徳川美術館所蔵品 法量表

No.	器種	点数	口径	高台・底径	器高	備考
113	白磁刻花蘭文皿	5口	12.1cm	4.2cm	2.7cm	
114	白磁刻花龍雲気文皿	5口	16.1cm	9.7cm	3.3cm	平底
41 91	白磁刻花龍文皿	8枚のうち	17.2cm	5.7cm	3.8cm	
42	白磁刻花蘭文皿	5枚	13.3cm	9.6cm	2.8cm	実測図
44	白磁刻花龍雲気文皿	10枚のうち	14.1cm	10.3cm	2.5cm	実測図

比較的軽い感じの柔らかめのもので、その上に黄味をわずかに帯びた白濁失透性の上釉が全体に施されている。釉下に雲気や竜文を刻花で表したものの二種が混ざって伝えられている。焼成は定窯と同様、伏せ焼きしている。やはり定窯写しの製品と見られ、日本では「鳥の子」と呼ばれ、またあるいは「切っ立皿」と呼ばれたものを想像させる器形の作品である。

(2)『華南のやきもの - 黄瀬戸・織部・青手古九谷の源流を求めて -』鑑賞シリーズ 1

平成 10 年 (1998) 根津美術館

41. 白磁刻花龍文皿 8 枚のうち

高 3.8cm 口径 17.2cm 底径 5.7cm

「大鳥子刺身皿」の箱書をもつ白磁皿である。見込みには文様を刻線で施し、外側に菊花弁を表した皿もある。砂張の覆輪が付く。(8 枚のうち 5 枚。五島美術館 No.99 と同じ皿。)

42. 白磁刻花蘭文皿 5 枚。図 9

高 2.8cm 口径 13.3cm 底径 9.6cm

尾張徳川家ではこのような皿を、「会席道具」と分類した。端反りの浅い皿で、腰に段を付け小さな高台を削り出し、定窯の作風に倣なっている。(実測図 2 に図があり、京都国立博物館 No.113 と同じ皿か。法量に違いがある。)

44. 白磁刻花龍雲気文皿 10 枚のうち。図 9。

高 2.5cm 口径 14.1cm 底径 10.3cm

白高麗ともいわれた白磁皿で、灰白色の胎土にわずかに黄味を帯びた白濁釉が掛かる。伏せ焼きし、口縁に砂張の覆輪が付く。(10 枚のうち 5 枚。実測図 2 に図が有り。京都国立博物館 No.114 と同じ皿か。法量に違いがある。)

(3)『向付 茶の湯を彩る食の器』特別展「向付 茶の湯を彩る食の器」図録

平成 21 年 (2009) 財団法人五島美術館

交趾・鳥子 「鳥子」は、釉調が鳥の卵に似て白く柔らかな趣であることから付いた中国産と考えられる白磁をいう。現在のところ、産地も時代も不明である。茶碗の中には、東南アジアのベトナムなどの白磁も含まれている。桃山時代の茶会記には懐石の食器として「鳥子」があらわれるが、江戸時代に入ると日本国内でも伊万里が磁器を制作するようになり、その実態が記録や記憶から失われていったものの一つである。

99. 大鳥子刺身皿 (白磁刻花龍文皿)

磁器 / 八枚 明時代・十七世紀

高さ 3.8cm 口径 17.2cm 底径 5.7cm

白磁で、銅を主体に錫を加え、銀や鉛などを少量含んだ、砂張という合金の覆輪(口縁部を覆う金属)がある。見込みの底には、雨龍という角のない竜が丸くうづくまる様子を線彫している。八枚が同じ箱に入って伝わるが、五枚には外側に二重の蓮弁が型押しで表され、三枚は無文である。器の内側と外側に釉薬が掛かる。蓮弁文のあるものの高台内には、輪トチのような痕跡がみられるが、無文のほうには無い。柔らかい釉調の白磁で細かな貫入(釉面に現れるひび)があらわれている。

箱書付には「ふち懸り 大鳥子指身皿 八つ」とあり、こうした白磁を「鳥子」と呼んでいたことがわかる。江戸時代、その用途は会席における指身(刺身)を盛る皿であった。(根津美術館 No.41 と同じ皿。)

5. 遺跡出土資料

伝世品にみられた平底皿と腰折れの端反皿が、堺環濠都市遺跡と一乗谷朝倉遺跡より出土している。発掘調査報告書の各報告文による。表 6 に遺跡出土法量表。

(1) 一乗谷朝倉氏遺跡

31 次、35 次、51 次、57 次の調査より出土。

31 次調査 (23) は白磁の皿である。破片資料から復元を試みた。外反気味に開く、底の浅い皿で高台はない。全体につくりは薄手で胎土は乳白色、釉調は黄白色を呈す。細かい貫入がみられる。口唇部は露胎で、いわゆる口禿口縁となっている。器壁内面に曲線の暗文がみられる。底部裏面にも釉がかけられている。顕著なるくろ目をのこす。

35 次調査 (160) の白磁皿も胎土は灰褐色で細かい貫入が全体に入る。碁笥底で、体部から口縁部にかけて直線的に、わずかに外反して広がる。畳付は尖らせて丁寧に釉が削り取られている。

51 次調査 中国製陶磁器の中に平底の白磁皿。(229) ~ (231) は、無高台の平底から体部はやや外反ぎみに立ち上がる。器壁はかなり

薄く2～3mmで、見込みに片篋描きの唐草文を施文する。3点は同一サイズで、最も良く残る(231)は、口径16.5cm、器高3.3cmを測る。

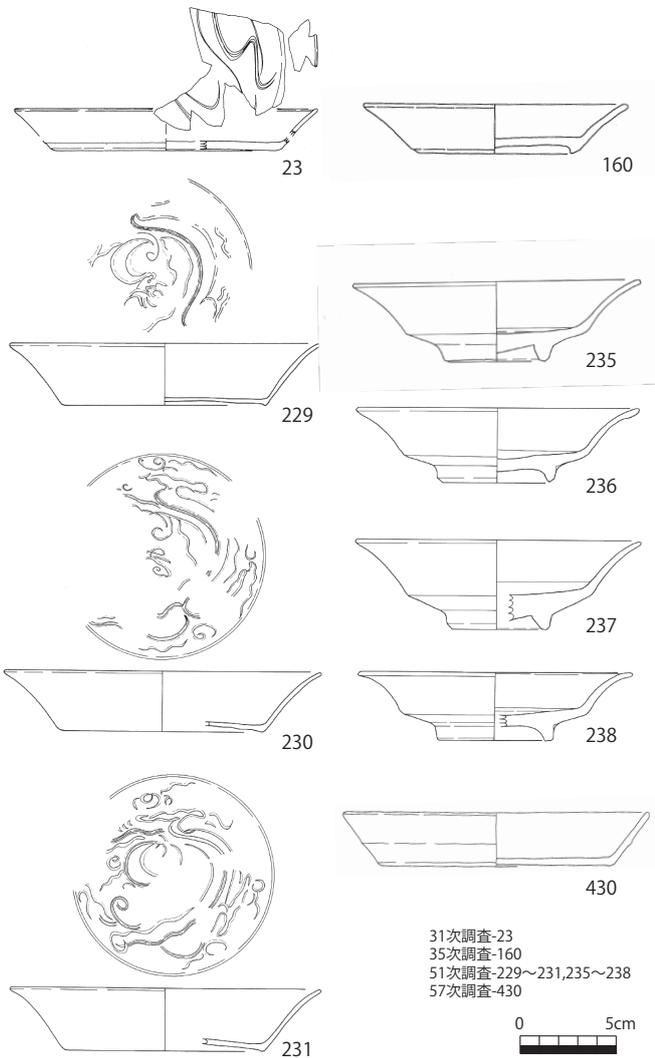


図10 一乗谷朝倉氏遺跡出土品

(235)～(238)は白磁の端反皿で、腰折れのタイプの。高台畳付け以内が露胎となる。(235)は口径15.4cm、器高4.25cm、高台内の中心が回転ケズリにより円錐状に尖る。(236)は口径15.8cm、器高4.0cm。(237)は口径15.0cm、器高4.7cm。(238)は口径14.5cm、器高3.7cmで、高台内のケズリ痕がナデ消され、畳付けは平坦で幅広い特徴を有す。

57次調査 中国製陶磁器中の白磁皿(430)で口径16.4cm、器高2.9cmを測る。底部外面

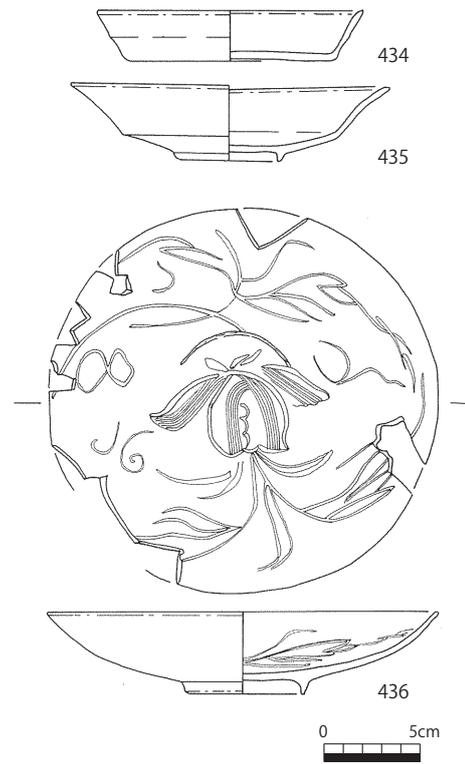


図11 堺環濠都市出土品

表6 遺跡出土(一乗谷朝倉氏遺跡・堺環濠都市遺跡) 法量表

遺跡名	器種	遺物No.	口径	高台・底径	器高	文様・備考
一乗谷朝倉氏遺跡	平底	23	(15.8cm)	(11.6cm)	(2.1cm)	刻文
	端反皿	160	(13.8cm)	(8cm)	(2.6cm)	碁笥底
	平底	229	(16.4cm)	(10.6cm)	(3.2cm)	唐草文
	平底	230	(16.6cm)	(10.6cm)	(3.2cm)	唐草文
	平底	231	16.5cm	(10.4cm)	3.3cm	唐草文
	端反皿	235	15.4cm	(5.2cm)	4.25cm	
	端反皿	236	15.8cm	(5.6cm)	4cm	
	端反皿	237	15.0cm	(5.0cm)	4.7cm	
	端反皿	238	14.5cm	(5.8cm)	3.7cm	
57次	平底	430	16.4cm	(12.0cm)	2.9cm	
堺環濠都市遺跡	平底	434	(14.0cm)	(10.6cm)	(2.6cm)	4個体
	端反皿	435	(16.8cm)	(5.4cm)	(4cm)	
	口縁内湾	436	(20.6cm)	(6.0cm)	(4.4cm)	牡丹唐草文

() の数値は実測図より

外周に潰れた三角形の僅かな高台を有し、体部は直線的に外上方へ伸び口縁に至るといった特徴的な形態を呈する。白濁化した乳白色の釉がかかるが、口唇部ではこれを拭き取り口禿としている。朝倉氏遺跡では少数ではあるものの定量存在するタイプである。

(2) 堺環濠都市遺跡 SKT263

第1次焼土層(博列建物 SB3)より出土。

陶胎の口禿白釉皿(434～435)は二次焼成により淡ピンク色となる。貫入は多く高台は貼付ける。皿(435)は体部付近で大きく腰折れし、皿(436)は口縁が内湾し見込みに牡丹唐草文が彫られ、皿(434)は平底で4個体出土した。

一乗谷朝倉氏遺跡、堺環濠都市遺跡から出土の白磁皿、平底皿、腰折端反皿は白濁化した乳白色、もしくは黄白色を呈し、細かい貫入が入り、口唇部が露胎した、いわゆる口禿口縁である。口禿口縁には覆輪が施され使用されていたものである。平底皿は器厚が2～3mmを測る薄い製品である。

伝世品にみられた器種、平底皿と腰折れの端反皿の他に、一乗谷朝倉氏遺跡の碁筥底白磁皿(160)は細かい貫入が全体に入っている等覆輪を付ければ口禿口縁と差異がなくなり、碁筥底白磁皿は第44・49・50次調査からも出土しており、貫入のあるものとないものの二種類あったのかもしれない。また堺環濠都市遺跡からは内湾する皿(436)が出土している。

6. 定窯の折腰盤と碟(せつ)平底皿

定窯の窯址は中国河北省保定市曲陽県にあり、曲陽県靈山鎮の潤磁、北鎮村および東西燕川、野北村一帯に集中して分布しており、邢窯の影響下に9世紀前半の唐代中期に誕生、晚唐・五代、宋代、金代、と発展し元代になると定窯は衰退している。700年余りに及ぶ定窯の歴史のなかで、宋代は最も高い評価を得た白磁製品が生産された時代で、宋代五大名窯の一つであり、中国の歴史において皇帝、宮廷に献上した期間が最も長く、またその文献記録の最も多い窯でもある。宋代、金代の定窯の刻花や印花の製品は名声を得るが、同時に各地の窯場ではその摸倣製品が作られている。定窯が衰退した元

代以降、とくに明・清時代には倣定窯製品が多く見られるようである。

清の藍浦『景德鎮陶録』には、「純白滋潤なるものを白定または粉定と称し、その質粗にして微黄を帯びるものを俗に土定と呼ぶと見える。然し又一説に粉定は南定を指し、土定は山西省の平陽窯に於ける倣定器を称するといふ。」南定は景德鎮。明代の景德鎮で定窯に見間違うほどの倣定器がつくられていたことを伝えている。

根津美術館と大阪市立東洋美術館の展示図録に腰折れ皿・盤と平底皿が見られる。

(1) 『定窯白磁』 昭和58年(1983)の展示図録

根津美術館に小山富士夫氏の定窯窯址採集陶磁器片が収蔵されている。この陶器片の整理研究報告を兼ねて昭和58年(1983)「定窯白磁展」が根津美術館で開催された。腰折れ皿実測図④⑰と平底皿実測図⑭⑱。図録より解説、図を転載した。表7に小山富士夫氏採集陶磁器片法量表。

「定窯窯址採集陶磁片考察表」より
実測図④、器形・皿、残存部位・口、胎土・白磁土、釉色・黄白、文様・劃蓮華文、備考・口縁施釉無

実測図⑰、器形・皿、残存部位・底/口、胎土・白磁土、釉色・黄白、文様・劃蓮華文、備考・疊付け施釉有り

実測図⑭、器形・皿、残存部位・底/口、胎土・白磁土、釉色・黄白、文様・劃蓮華文、備考・高台無 口縁施釉無

実測図⑱、器形・皿、残存部位・底/口、胎土・白磁土、釉色・黄白、備考・高台無

白磁土とは夾雑物を全く含まないきめ細やかな白色磁土

釉色の黄白とは黄白色の透明釉

劃蓮華文とは劃花(片切彫)による蓮華文(萱草文)のあるもの。

(2) 『定窯・優雅なる白の世界—窯址発掘成果展』 平成25年(2013)の展示図録

腰折盤と碟(せつ)平底皿が見ら、図録より図を転載した。No. はそのままである。表8に定窯出土品法量表。

潤磁嶺窯 A 区の第三期、北宋晩期(1086～

1127) の段階に、内底面に萱草文か蓮花文の装飾が彫り込まれた胴の深い腰折れ盤、図 32 (本稿図 13) と内底面に角のない龍とされる「螭(ち)」が、胴部外面には蓮弁文が彫り込まれた腰折れ盤、図 36 (本稿図 13) と内底面に角のない龍とされる「螭(ち)」が、「螭」は龍に類し、とぐろを巻きくねくねと這う姿から「蟠螭(ばんち)」とも呼ばれる。

出土品の解説は展示図録よりの抜粋で No. はそのままである。

金 (1115 ~ 1234) 前期で潤磁嶺 C 区の出土品、

39. 白磁刻花蓮花文碟

高 2.0cm 口径 11.5cm 底径 7.7cm、

小ぶりの平皿で、「碟」と呼ばれ見込みには刻花により折枝状の蓮華文。釉薬は酸化焼成のためやや黄味を帯びた牙白色(アイボリーホワイト)で、光沢と潤いのある質感を見せています。口縁部は釉薬が拭き取られた露胎となっており、覆焼(伏せ焼き)されていたことが分かります。満釉の底部は平底で内側がやや凹んでいます。底部周囲には幅広の削りが施されています。

金 (1115 ~ 1234) 後期で潤磁嶺 A 区の出

土品、

45. 白磁刻花龍文“東宮”銘輪花盤

高 5.6cm 口径 24.6cm 底径 8.1cm、

口縁部に 6ヶ所の切り込みを入れて輪花形にした大振りの盤です。見込みいっぱい刻花により龍文と宝珠文が表されており、龍の鬚や体毛の表現には櫛目技法も用いられています。龍文は、頭がちょうど盤の中央にあり胴部を反時計回りにくねらせ環状としたいわゆる団龍文となっており、龍の表情はどこかユーモラスで愛嬌が感じられます。こうした龍の表現は金代定窯の特徴の一つといえるかもしれません。釉薬はやや黄味がかかった牙白色(アイボリーホワイト)で、光沢のある質感を見せています。底部を含めた全面に施された満釉で口縁のみ拭き取られて露胎となっていることから、覆焼(伏せ焼き)されていることが分かります。この種の盤は盤形支圈と環形支圈を用いて匣鉢の中で重ね焼きされており、金代定窯の主要な器種の一つといえます。背の低い、幅の細かい輪高台が付いており、高台内には施釉後に線刻された「東宮」銘が見られます。この銘によりこの盤が金の宮廷用につくられたものであることがはっきりと分かります。

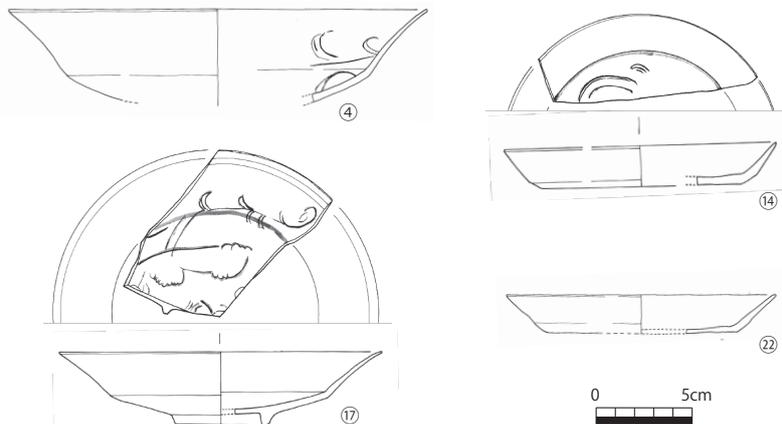


図 12 小山富士夫氏採集腰折れ皿・平底皿実測図

表 7 小山富士夫氏採集陶磁片 法量表

No.	器種	内文様	口径	高台・底径	器高	備考
④	皿	劃蓮華文	(22cm)			実測図
⑰	皿	劃蓮華文	(17cm)	(4.8cm)	(3.8cm)	実測図
⑭	皿	劃蓮華文	(14.4cm)	(10.5cm)	(2.2cm)	実測図
㉒	皿		(14.2cm)	(10cm)	(2cm)	実測図

『定窯白磁』より

() の数値は実測図より

46. 白磁刻花龍文“東宮”銘輪花盤、

図46 (本稿図14)

高 5.5cm 口径 25.0cm 底径 8.2cm

No.45と同じ「東宮」銘の盤で、器形や大きさなどもほぼ同じです。見込みの龍文の基本構図や刻花のタッチも同様であることから、同一陶工の手になるものかもしれません。「東宮」刻銘はやはり高台内のやや右寄りに位置し、書体もNo.45とほぼ同じです。釉薬は酸化焼成によりやや黄味を帯びた牙白色（アイボリーホワイト）で、光沢と潤いのある質感で、外面には定窯ならではの「涙痕」と呼ばれる釉が流下して少し厚くなった部分が見られます。宮廷向けの規格化された製品の生産の状況をうかがい知ることができる貴重な資料です。

なお遺跡出土資料で、現在定窯白磁と確認されたのは、鎌倉北条時房・顕時邸出土の白磁片2点と一乗谷朝倉氏遺跡の白磁片2点と福岡鴻臚館跡の定窯系稜花口縁皿の3例のみである。

7. 茶会記の「鳥子皿」

茶会記に「鳥子」が記載されていた。五島美術館の特別展『向付 茶の湯を彩る食の器』の図録中、第六部論考編に、砂澤祐子編「茶会記に見る会席の陶磁器一覧」があり、『松屋会記』、『天王寺屋会記』、『神屋宗湛日記献立』、『槐記』より、会席に利用された陶磁器（土器かわらけを除く）の種類を抽出されている。同じ茶会で違う陶磁器が使用されている場合は、/で区切り区別される。

茶会では抹茶を飲む前に懐石（会席）で軽い

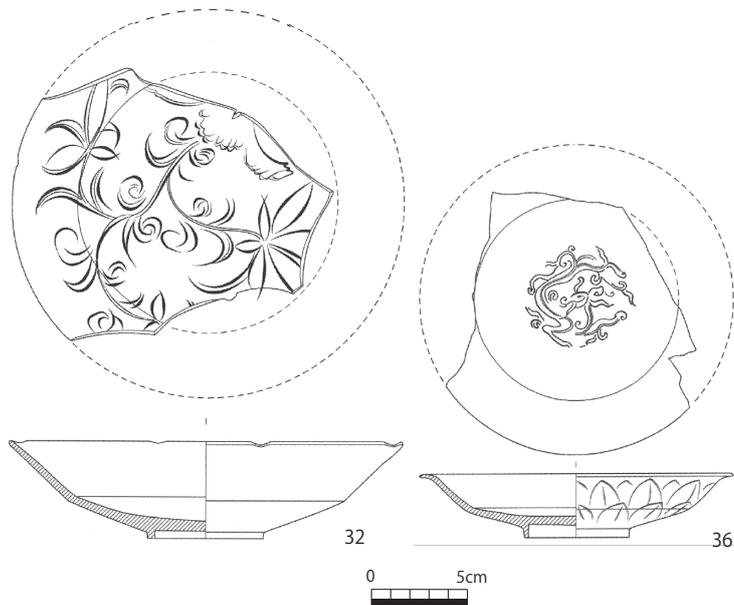


図13 腰折れ盤

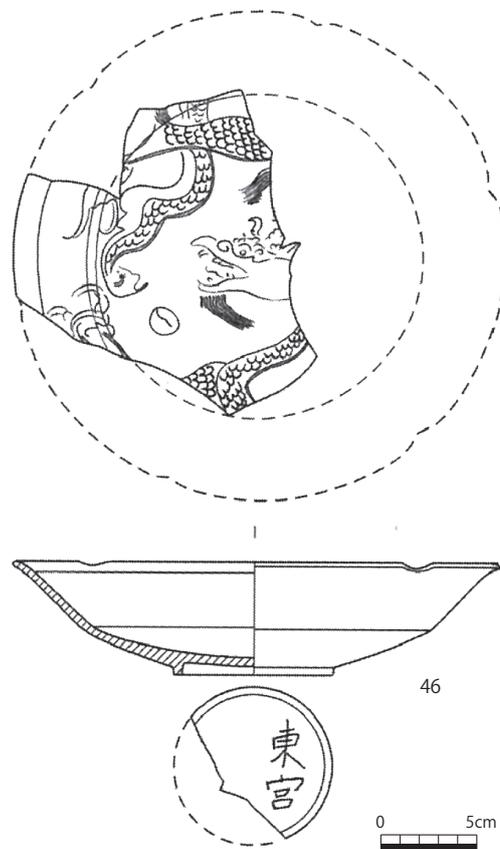


図14 “東宮”銘輪花盤

表8 定窯出土品 法量表

No.	器種	内底文様	口径	底径	器高	備考
32	白磁刻花蓮花輪花盤	蓮華文	(20.8cm)	(6cm)	(5cm)	
36	白磁刻花龍文輪花盤	蟠龍文	(16.4cm)	(5.4cm)	(3.4cm)	
39	白磁刻花蓮花文碟	折枝状蓮華文	11.5cm	7.7cm	2cm	
45	白磁刻花龍文輪花盤	団龍文	24.6cm	8.1cm	5.6cm	東宮銘
46	白磁刻花龍文輪花盤	団龍文	25cm	8.2cm	5.5cm	東宮銘

『定窯』 「出品作品解説」 より ()の数値は実測図より

食事をすする。向付は懐石で使用された器で陶磁製、黄瀬戸、志野、織部の桃山陶の向付がよく知られている。

天正2年(1574)から享保19年(1734)までの160年間に158回の茶会が開催されている。天正年間(1573～1592)では20年に78回、文禄年間(1592～1596)では4年に5回、慶長年間(1596～1615)では20年に9回、元和年間(1615～1624)では9年間に1回、寛永年間(1624～1644)では20年に22回、正保年間(1644～1648)では4年に5回、享保年間(1716～1736)では20年間に38回、の茶会記に記載された会席の陶磁器一覧である。

これを基に作成したのが、表9の茶会記に見る会席の「鳥子皿」である。

「鳥子皿」「鳥ノ子」「鳥子」の記述が19カ所、ただし天正2年(1574)2月3日朝主が上様(織田信長)官用皿/鳥皿『天王寺屋会記』宗及他会記に、「鳥皿」とあり、「鳥子皿」の可能性もあるが「鳥子」でないため表9からは除外した。

天正3年(1575)8月10日に津田宗及の茶会に「鳥子皿」が初めて登場する。

天正年間の78回の茶会記で「鳥子皿」が記載された茶会記は15回で、天正3年(1575)から天正8年(1580)までの6年間に集中しており、津田宗及が亭主となった茶会は天正6年(1578)11月22日の茶会まで合わせて13回、「鳥子皿」が使用されていたことがわかる。津田宗及は「鳥子皿」をたいへん気に入り、茶会のたびに毎回使用していたとも推察される。

天正7年(1579)には佐久間勘九郎が「鳥子皿」を、織田信長の老家臣で武将随一といわれた佐久間信盛の息子が勘九郎である。天正8年(1580)には惟任日向守(明智光秀)が「鳥子皿」を、寛永4年(1627)には中左近が「鳥子皿」を、寛永15年(1638)には松平下総守が「鳥ノ子サラ」を、松平忠明は江戸幕府大政参与で徳川家光の後見人である。寛永18年(1641)には大蔵長右衛門が「鳥子皿」を、大蔵六蔵の通称が長右衛門、能役者小鼓方である。正保3年(1646)には石井宗有「鳥子フクリンキク皿」を使用しており、様々な人に「鳥子皿」が好まれていたことが窺われる。

天正、享保、寛永は存続期間が長い20年間で、茶会も多く開催されているが、「鳥子皿」

表9 茶会記に見る会席の「鳥子皿」

西暦	年 月 日	時	主	陶磁器	会 記
1575	天正3年 8月10日	朝	天王寺屋(津田)宗及	鳥子皿	『天王寺屋会記』宗及自会記
1576	天正4年 7月22日	朝	天王寺屋(津田)宗及	鳥子皿/菊皿	『天王寺屋会記』宗及自会記
	8月4日	朝	天王寺屋(津田)宗及	鳥子皿/菊皿	『天王寺屋会記』宗及自会記
1577	天正5年 5月15日	昼	天王寺屋(津田)宗及	鳥子皿	『天王寺屋会記』宗及自会記
	5月20日	朝	天王寺屋(津田)宗及	鳥子皿	『天王寺屋会記』宗及自会記
	8月30(晦)日	晩	天王寺屋(津田)宗及	鳥子皿	『天王寺屋会記』宗及自会記
	9月8日	朝	天王寺屋(津田)宗及	鳥子皿	『天王寺屋会記』宗及自会記
	9月15日	朝	天王寺屋(津田)宗及	鳥子皿	『天王寺屋会記』宗及自会記
	9月25日	朝	天王寺屋(津田)宗及	鳥子皿	『天王寺屋会記』宗及自会記
1578	天正6年 2月29日	昼	天王寺屋(津田)宗及	鳥子皿	『天王寺屋会記』宗及自会記
	6月7日	朝	天王寺屋(津田)宗及	鳥子皿/菊皿	『天王寺屋会記』宗及自会記
	6月15日	昼	天王寺屋(津田)宗及	鳥子皿	『天王寺屋会記』宗及自会記
	11月22日	朝	天王寺屋(津田)宗及	鳥子皿	『天王寺屋会記』宗及自会記
1579	天正7年 10月28日	朝	佐久間甚九郎	鳥子皿	『天王寺屋会記』宗及他会記
1580	天正8年 1月9日	朝	惟任日向守(明智光秀)	鳥子皿	『天王寺屋会記』宗及他会記
1627	寛永4年 7月6日	晩	中左近	鳥子皿	『松屋会記』久重茶会記
1638	寛永15年 1月4日	朝	松平下総守	鳥ノ子サラ	『松屋会記』久重茶会記
1641	寛永18年 2月19日	朝	大蔵長右衛門	鳥子皿	『松屋会記』久重茶会記
1646	正保3年 3月7日	朝	石井宗有	鳥子フクリンキク皿	『松屋会記』久重茶会記

砂澤祐子編『茶会記に見る会席の陶磁器一覧』より抽出

の記載例は、天正年間の78回の開催では15回、ところが享保年間の38回の開催では使用例は無く、寛永年間の22回の開催では3回である。「鳥子皿」は天正年間の前半に登場しており、織田信長が茶道具の名品を収集した「名物狩り」を行っていた頃でもあり、その後空白の47年間を経て、再登場するのが寛永4年(1627)である。

千利休の詫茶大成の時期と小堀遠州らが新しい茶の湯を発展させた時期に「鳥子皿」が使われている。唐物から和物への変化の中で、見いだされたのかもしれない。將軍家の御成による武家の茶の湯でも、この「鳥子皿」が好まれたのは、定窯の白磁製品に対する、白いやきものへの憧れが連綿と続いていたからではないのだろうか。それ故に長く使われ伝世したのかもしれない。

8. 「トリ皿」

日明貿易の末期を知る貴重な資料『策彦入明記』は天文6年(1537)、天文16年(1547)の二度、大内義隆が指導して行った遣明使節の記録類である。遣明船で明に渡った禅僧策彦周良の克明な記録を総称したもので、中国寧波での中国係官との交渉や、寧波沖に仮泊していたころの買物帳や、北京まで各地での見聞、北京での皇帝拝謁など朝貢の様子が記録される。明で様々な陶磁器を購入しておりその中の陶磁器の記載に、青磁、白磁、染付が見られる。天文19年(1550)6月9日に帰国。天竜寺塔頭妙智院の3世住持策彦周良は五山文学史に足跡を残し、武田信玄、織田信長らとも交渉があったという。

長谷部楽爾著『原色日本の美術第29巻 請来美術(陶芸)』「日本人の趣味と請来陶磁(室町時代)」1972の策彦周良の請来陶磁より抜粋する。

碎器香炉一 青茶碗三 小茶碗二
 青茶碗盃一 白トリ皿十
 白キツタテ十 白ワキ皿十
 クワンニウ大トリ皿十 キツタテ十
 青キツタテ十 碎器茶碗一
 船様花瓶一 定器大四 定器小八

芙蓉盃三 碎器皿小十 碎器芙蓉盃一
 四角碎器皿四 土物水統一
 柱花瓶一 青茶碗皿二十 酢塩皿三百
 染付茶碗三十 染付皿百
 白菊皿二十 碎器二号大皿十
 白菊前塩小皿十 前塩皿四十
 白切立茶碗皿十 青酢塩皿四十
 白トリ皿十 クワンニウ大トリ皿十
 白キツタテ十 白ワキ皿十

と多くの陶磁器が見られる。青は青磁、白は白磁、碎器は釉に貫入のある器で、キツタテは、胴または縁がまっすぐに立ち上がった碗や皿のことである。

この「トリ皿」については河原正彦氏が『特別展覧会 日本人が好んだ中国陶磁』平成3年(1991)において「トリ皿も後世「鳥の子皿」とか単に「鳥の子」と呼ばれ、鳥の卵殻に似た粗製の定窯風の白磁ではなかったかと思われる。また芙蓉も菊形も花形(稜花)の盃や小皿で、とくに日本人には好まれた器形であった」と書かれている。

天文年間(1532～1555)には「トリ皿」、砂澤祐子編「茶会記に見る会席の陶磁器一覧」には、天正2年(1574)2月3日朝、主が上様(織田信長)、官用皿/鳥皿『天王寺屋会記』宗及他会記には織田信長が「鳥皿」との記述がある。

9. 「鳥の子皿」とは

伝世品の「鳥の子皿」に共通するのは、黄味をおびた光沢のある白い透明の釉が全面施釉され、全面施釉の釉には細かい貫入が入る。内定面には蓮華文や龍文が描かれるが貫入のため文様がたいへん視づらく、実測図も苦心の図となった。古い段階のものは器厚が薄く軽い。文様は新しくなるに従って簡略化され、はじめの構図が理解できていないと、何が描かれているのかわからないほど簡略化が進む。

腰折れの端反皿、高台付端反皿、平底皿、五花平底皿、高台付丸皿、向付、小鉢等の器種が見られたが、腰折れの端反皿、平底皿、五花平底皿について、口禿は確認できるものの仔細に観察したが覆焼きの痕跡は認められなかった。

しかし小碗形の向付は涙痕の釉溜まりが見られ覆焼きが認められた。

腰折れの端反皿は、古い段階のものは釉調が少し青味をおびた白色(1)で底部の器厚が薄く総重量が161.1gと軽い。しかし新しくなると釉が灰乳濁色(13~23)の白磁と思えないような釉調になり、器厚が3mm~5mmと全体に厚く総重量が312.5g(平均値)と重い。鉄分の吹き出しが見られ、どの製品にも釉に細かな貫入がはいる。

平底皿(2~11)は、黄色味をおびた透明で光沢のある釉が全面に施釉され、内底面には蓮華文や龍文が描かれる。全面に細かい貫入がはいる。底部の器厚が薄いものでは1mmと薄く総重量が110.1g(平均値)と軽い。底部に窯道具の痕跡(7~11)が、縁辺にピン痕が5カ所と中央に1カ所見られ、中央の1カ所は底部中央を支えるためのものかもしれない。

五花平底皿(12)は、うすい黄色味をおびた白色を呈した透明釉が全面に施釉され、釉肌は光沢があるが、全面に細かい貫入が入る。底部裏には布痕と縁辺にピン痕が5カ所と中央に1カ所見られる。

なお平底皿と五花平底皿では、鉄分の吹き出しが黒・茶の斑点となって見られた。

向付(24~28)は、淡い黄色味を帯びた白色の透明釉が全面に施釉され、口縁下に涙痕といわれる釉溜まりが見られることから、覆焼(伏せ焼き)で焼かれていた。全面に細かい貫入。内底面(見込)部分が広い。

今回紹介した器種以外に、五花平底皿(写真13・14)、高台付五花鉢が見られた。



写真13 五花平底皿 口径16.5cm 器高3.4cm

尾張徳川家(徳川美術館)には、白磁刻花蘭文皿(5客)、白磁刻花竜雲気文皿(5客)、白磁刻花龍文皿(8客)、白磁刻花蘭文皿(5客)、白磁刻花龍雲気文皿(10客)がある。端反皿には小さな削り出し高台のもの(113.42)と平底(114.44)がある。二重の蓮弁文が外側に型押しされた皿と無文の皿があり(41.99)、蓮弁文型押しの高台内には輪トチンのような痕跡が見られるが、無文には無い。尾張徳川家の伝世品は、「鳥の子」の中でも優品といわれるものであろう。

定窯の製品をまねた倣定器は俗に土定とも呼ばれており、「鳥の子」は土定である。景德鎮周辺で焼かれており明代には磁州窯でも少量焼かれているという。

伝世品にみられた平底皿と腰折れの端反皿に類似する器形が、堺環濠都市遺跡と一乗谷朝倉遺跡より出土している。堺環濠都市遺跡では茶道具蔵と考えられる建物の焼土層から出土しており、慶長20年(1615)に被災した建物で天正元年(1573)以降に建てられたと考えられている。一乗谷朝倉氏遺跡は天正元年(1573)に織田信長の焼き討ちにより朝倉氏は滅亡している。一乗谷朝倉氏遺跡から、天正元年(1573)以前にすでに「鳥の子」があり、堺環濠都市遺跡から、天正年間(1573~1592)に堺でも「鳥の子」があったことがわかる。

茶会記に記載された「鳥の子」の最初は、天正3年(1575)の津田宗及の茶会である。天正3年(1575)から天正8年(1580)までの6年間に「鳥の子」の茶会が多いが、遺跡と同様に天正年間である。



写真14 五花平底皿 裏 底径14.6cm

一方で日明貿易の末期を知る貴重な資料『策彦入明記初渡集』に記載された「トリ皿」は天文6年(1537)、天文16年(1547)の二度遣明船で明に渡った禅僧策周良の陶磁器購入記録の中に見られ、「トリ皿」と呼称される。「トリ皿」の記述から、早ければ天文6年(1537)、遅くとも天文16年(1547)には「鳥の子」の呼称があったと考えてもいいように思われる。

しかしこの頃の遺跡出土の白磁皿には伝世品に類似のものはないのである。陶磁器の購入記録にそれまでの白磁の製品と区別するために「白トリ皿」と記載したか、一般的な呼称ではなかったのかもしれない。

砂澤祐子編「茶会記に見る会席の陶磁器一覧」には、天正2年(1574)2月3日朝、主が上様(織田信長)、官用皿/鳥皿『天王寺屋会記』宗及他会記に、織田信長が「鳥皿」を使用した記述がある。岐阜城での茶会である。この「鳥皿」がいくばくかの影響を与えたことであろう。これを期に「鳥の子皿」が広まっていったように思われる。

伝世品の箱書の箱底に『くわんにゆう 大皿拾』『貫入鳥乃子皿 十 金フクリン』『元和七年(1621)(削られ不明)〇〇辛酉 正月吉日』の紀年銘があり、元和7年(1621)での「鳥の子」である。腰折れ端反皿(13~23)で、黄色味を帯びた乳灰濁色の釉で外面に鉄分の吹き出し斑点が多くみられる。釉が乳灰濁色で白磁と思えないような釉調で器厚が全体に厚くなっている。

寛永17年(1640)オランダを巻き込んだ「寛永大恐慌」といわれる不況に続き、寛永19年(1642)の大飢饉が当時の経済構造に、その土台を揺るがす激震として作用し、甚大な被害を与え、その結果「初期豪商」が没落し、国内市場の再編成がなされた時期でもある。それまでの豪商から新しい価値観・美意識をもった新興商人への交代である。

茶会記では正保3年(1646)の石井宗有「鳥子フクリンキク皿」が一番新しい記述となり、この後に記述はない。1640年代「初期伊万里」が本格的に染付磁器を生産し流通がはじまるが、美濃では織部が終焉し、その後は雑器生産窯として低迷する。17世紀中頃には「鳥の子」

も忘れさられた白磁の別称となっていたのかもしれない。

なお江戸の遺跡東京都千代田区『神田淡路町二丁目遺跡』に「鳥の子」が出土していると鈴木裕子氏よりご教示があった。報告書の遺物説明より写真66-2(第167図-11)「白磁の碗。薄手である。釉は灰白色で厚めに掛かり、黒色の貫入が全面に入る。胎土は白に近い白色で緻密な土であるが、露胎部は橙色に発色している。

10. おわりに

『策彦入明記』と『松屋会記』、『天王寺屋会記』、『神屋宗湛日記献立』、『槐記』の、茶会記より、茶会では「鳥の子皿」が使用されたのは天正3年(1575)から天正8年(1580)までの6年間に「鳥の子」の茶会が多いこと、堺環濠都市遺跡から、天正年間(1573~1592)に「鳥の子」が出土しており、天正年間の茶会に使用されていたことはうなずける。一乗谷朝倉氏遺跡は天正元年(1573)に朝倉氏が滅亡していることから、天正元年(1573)以前にすでに「鳥の子」が存在していたことは明らかである。

「トリ皿」の記述は、早ければ天文6年(1537)、遅くとも天文16年(1547)には使われており、五山文学の巨匠ともいわれ織田信長も帰依した禅僧策彦周良が購入した「白トリ皿」を、天正2年(1574)の岐阜城での茶会に織田信長が「鳥皿」を使ったのを機に、広く知られるようになり、茶会で「鳥の子」が広まっていったと考えられなくもない。

そして茶会記では正保3年(1646)の「鳥子」を最後に見られなくなるのである。

唐物から和物への変化の中で見いだされ、定窯の白磁製品に対する「白いやきもの」への憧憬が連綿と続いていたように思われ、17世紀中頃、初期伊万里が本格的に染付磁器を生産し流通がはじまると「鳥の子」も輸入されなくなり、忘れさられた「やきもの」白磁の総称となっていたのかもしれない。

伝世品について蛍光X線分析の結果、定窯潤磁村、燕山の出土品との相違が明らかになっ

たが、定窯出土品と「鳥の子」伝世品の差異は窯場の違いであると思われる。1. 端反皿は伝世品の中では一番古い時期で、三角ダイアグラムのCaO(カルシウム)に偏りがみられるが、透明釉が定窯出土品に近い成分の釉になっていたが故にと考えられなくもないのである。そして覆輪が真鍮製であることも成果の一つといえる。

本稿を作成するにあたり、貴重な資料の提供をはじめ、ご指導とご教示を頂戴した鶴飼雅弘、江崎 武、鬼頭 剛、佐藤公保、鈴木正貴、鈴木裕子、武部真木、永井邦仁、永井宏幸、松浦繁蔵、水村伸行、吉田光春の各氏に、記して謝意を表するものである。

引用・参考文献

- 長谷部楽爾 1972 『原色日本の美術第 29 巻 請来美術 (陶芸)』小学館
田賀井秀夫 1974 『入門やきものの科学』共立出版
森田 勉 1982 「14～16 世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究 No.2』
上田秀夫 1982 「14～16 世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究 No.2』
小野正敏 1982 「15～16 世紀の染付碗、皿の分類と年代について」『貿易陶磁研究 No.2』
関口広次 1983a 「小山富士夫先生採集の定窯窯址陶磁片について」『定窯白磁』
関口広次 1983b 「定窯窯址採集陶磁片考察表」『定窯白磁』
江本義理 1983 「定窯磁器の材質について」『定窯白磁』
小野正敏 1985 「出土陶磁よりみた 15、16 世紀における画期の素描」『MUSEUM』No.416
米原正義 1989 「茶の湯」『織田信長事典』新人物往来社
高嶋廣夫 1994 『陶磁器釉の科学』内田老鶴圃
稲垣正宏 2008 「遺跡出土の 14・15 世紀茶道具」『野村美術館研究紀要 17』
水澤幸一 2009 『日本海流通の考古学 中世武士団の消費生活』高志書院
加藤榮一 2012 「オランダ船と陶磁器貿易の変遷 一十七世紀初頭から明清兵革まで」『出光美術館 館報第 158 号』
川添昭二編 1988 『よみがえる中世 1 東アジアの国際都市博多』平凡社
小野正敏・水藤 真編 1990 『よみがえる中世 6 実像の戦国城下町越前一乗谷』平凡社
王莉英・穆青 2009 富田哲雄訳 『定窯瓷 中国名窯シリーズ 6』株式会社二玄社
第 34 回貿易陶磁研究会研究集会 2013 『近世都市江戸の貿易陶磁 発表要旨』日本貿易陶磁研究会
関西近世考古学研究会 2016 『関西近世考古学研究 24 歴史資料としての近世貿易陶磁』
五月書房 1980 昭和 55 年覆刻版 『陶磁大辞典』「定窯」
吉川弘文館 1985 『国史大辞典 6』「策彦周良」
講談社 1995 『クロニク戦国全史』「策彦周良」
根津美術館 1983 『定窯白磁』
京都国立博物館 1991 『特別展覧会 日本人が好んだ中国陶磁』
根津美術館 1998 『華南のやきもの - 黄瀬戸・織部・青手古九谷の源流を求めて -』鑑賞シリーズ 1
堺市博物館 2006 『茶道具拝見 - 出土品から見た堺の茶の湯 -』
財団法人五島美術館 2009 『向付 茶の湯を彩る食の器』特別展「向付 茶の湯を彩る食の器」図録
大阪市立東洋美術館 2013 『国際交流企画展 定窯・優雅なる白の世界 - 窯址発掘成果展』
鎌倉市教育委員会 1988 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 4 「北条時房・顕時塚」』
堺市教育委員会 2004 『堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告 - SKT263・甲斐町東 2 丁 -』堺市文化財調査概要報告 第 103 冊
福井県教育委員会 1983 『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡 県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』第 35 次調査報告
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 1997 『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告書VI 第 29・30 次、第 57・58 次、第 83 次調査』
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 2001 『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告書VIII 第 44・17 次調査』
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 2007 『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告書IX 第 49・50 次調査』
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 2010 『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告書X 第 51・52 次調査』
淡路町二丁目西武地区市街地再開発組合 株式会社四門 2011 『神田淡路町二丁目遺跡』
福岡市教育委員会 2013 『史跡 鴻臚館跡 鴻臚館 20 - 南館部分の調査 (2)』福岡市発掘調査報告書第 1213 集